美術表現研究　講義「幼児表象画」
コンバイン〈結合図〉の描画発達

竹永亜矢

Study on Expressions in Art based on the Course, Young Children's Representative Pictures: Drawing Development during the Combine Stage

Aya Takenaga

Abstract

In the development of pictorial representations, young children first make scribbles and then diagrams, combines, and aggregates. In these stages, through real experiences with the emotional and physical development as well as the accumulation of experiences in living, children independently explore and develop self-awareness and ability to think and express something.

This paper considers the development of expressions and the involvement of young children in drawing activities by analyzing their graphical representations that show the transition from the combine through aggregate stages, where children experimentally make combinations of the line and shape patterns they have acquired to actively attempt to create designs.

Keywords: young children's representative pictures, pictorial development, combine, art expressions, Rhoda Kellogg

要約

表象画の発達は、スクリブルからダイアグラム〈単体図〉を経てコンバイン〈結合図〉、アグリゲイト〈集合図〉へと移行し、心身の発達、生活体験の広がりとともに実体験を通して自己の認識、思考、表現への探索と構築が主体的に進められる。

本論では、コンバイン〈結合図〉からアグリゲイト〈集合図〉への移行が表れる幼児表象画の作品分析から、これまで獲得した描画形態を実験的に構成し、新しいデザインへの試みが意欲的に展開されるこの時期の表現の発達と、子どもの描画へのかかわりについて考察する。

キーワード：　幼児表象画・描画発達・コンバイン・美術表現・ローダ・ケロッグ

1. はじめに

児童描画の心理的研究者ローダ・ケロッグ（Rhoda Kellogg 1998）による描画の発達研究において、子どもの描画は生後 10 か月頃より開始される「スクリブル期〈scribbles〉」から「ダイアグラム〈diagrams／単体図〉」へ移行し、それに続く「コンバイン〈combines／結合図〉」「アグリゲイト〈aggregates／集合図〉」発達の最終段階「ピクチャー・ステージ〈picture・stage／絵画期〉」まで、全ての発達過程を繰り返しながら 0 歳から 6 歳の幼児期に描画表現の基礎を獲得していることが提起された。

スクリブル期に基本的スクリブルの形態を獲得し、心身の発達とともに他者とのコミュニケーションが活発になり、次の描画発達段階であるダイアグラム〈単体図〉へ移行すると他者との伝達手段となる具体的な形態表現「表象画」が表出する。（竹永・2020）ダイアグラム〈単体図〉の描画経験の蓄積から、次の描画発達段階であるコンバイン〈結合図〉へ向かう発達の兆候として、ダイアグラム〈単体図〉で描画される形態が豊富になり、複数の形態構成によるデザインが実験的に展開され、アグリゲイト〈集合図〉への移行もほぼ同時に開始される。

園田（1980）は、コンバイン〈結合図〉の描画発達時期と重なる 3 歳前後の子どもの創造的活動について、大脳生理学的に人間と他の動物とのもっとも大きな違いである前頭葉の組織の充実とともに思考力、判断力、意志力が生まれ、創造的な活動への足場となる知性や感性の格段の発育から”やる気“が生じ、自発性を培う上で最も重要な時期であると述べている。この時期の子どもの描画は自身を取りまく環境で受けた刺激や記憶を他者と共感、共鳴しながら自分の表現スタイルを探究するため、同じ年齢のクラス内においてもひとり一人発達段階に個性が表れる。そのため子どもの毎日の活動に寄り添う保育者も子どもの個性と成長に応じた描画への関わりや援助、環境設定に試行錯誤する時期といえる。

本論では、ローダ・ケロッグ（Rhoda Kellogg 1998）『幼児絵画の発達』とジェローム・シーモア・ブルーナー（Jerome S. Bruner 1976)『認知能力の成長と 3 つの表象』に基づき、コンバイン〈結合図〉からアグリゲイト〈集合図〉へ移行する幼児表象画の発達と描画表現にいて考察し、自己の表現を確立させ、創造性の起点となるこの時期の子どもの描画表現と創作活動に対する保育者のかかわりについて論じる。

2. 描画の考察方法

（1）描画の分類方法　ローダ・ケロッグ『幼児絵画の発達』（Rhoda Kellogg 1998）

Ⅰ. スクリブル期〈scribbles〉前期・後期

Ⅱ. ダイアグラム〈diagrams／単体図〉

Ⅲ. コンバイン〈combines／結合図〉

Ⅳ. アグリゲイト〈aggregates／集合図〉

Ⅴ. ピクチャー・ステージ〈picture・stage／絵画期〉

以上Ⅰ．～Ⅴ．の発達過程から、Ⅲ．コンバイン〈結合図〉～Ⅳ．アグリゲイト〈集合図〉への移行開始までの描画を考察する。

（２）表象の分類方法　ジェローム・シーモア・ブルーナー

『認知能力の成長と３つの表象』　（Jerome S. Bruner 1976）

Ⅰ．動作的表象〈enactive representation〉

自己中心、外と内の区別が確かではない。動作による直接的な（感覚運動的）把握

Ⅱ．映像的表象〈iconic representation〉

表面的な形のイメージ（映像）による対象の把握

Ⅲ．象徴的表象〈symbolic representation〉

文字・記号・言語による対象の把握

上記３段階の表象発達を遂げた成人においては、全ての表象を持ち合わせて生活している。

（３）考察対象作品と描画年齢（週齢）

男児Ｋの縦断的描画作品群から、3 歳 0 か月（163 週目）～3 歳 3 か月（177 週目）に描画されたダイアグラム〈単体図〉～コンバイン〈結合図〉～アグリゲイト〈集合図〉までの移行期も含めた作品合計 43 点〔表２〕から、コンバイン〈結合図〉を中心として、同形もしくは類似するダイアグラム〈単体図〉を用いて構成が展開された作品 13 点〔表１〕を抽出し、描画発達過程を考察する。

表１．

対象作品発達段階　【43 点中】	作品数
ダイアグラム〈単体図〉	1 点
ダイアグラム〈単体図〉からコンバイン〈結合図〉への移行作品	7 点
コンバイン〈結合図〉の表出作品	3 点
コンバイン〈結合図〉からアグリゲイト〈集合図〉への移行作品	2 点
抽出作品　合計	13 点

（４）表２．男児Ｋの「コンバイン〈結合図〉描画作品発達表」【全 43 点】表記内容

作品番号 0～42，作品 D（ダイアグラム），作品 C（コンバイン）移行期も含める。

描画年齢（週齢），子どもの言葉の記録有無，絵画の発達段階，表象の発達段階を表記。

表２．男児Ｋの「コンバイン〈結合図〉描画作品発達表」　【全 43 点】

作品番号	作品 D ダイアグラム C コンバイン	描画年齢 (週齢)	子ども言葉の記録 有●	発達段階 絵画	発達段階 表象
0	D－4 (1)	3 歳 0 か月 (163 週)	●	D	動
1	C－1 (1)	3 歳 1 か月 (166 週)	●	D 単体図 から C 結合図 への移行	動作的表象期〜映像的表象期
2	C－1 (2)	3 歳 1 か月 (166 週)	●		
3	C－1 (3)	3 歳 1 か月 (166 週)	—		
4	C－1 (4)	3 歳 1 か月 (166 週)	●		
5	C－1 (5)	3 歳 1 か月 (166 週)	●		
6	C－1 (6)	3 歳 1 か月 (166 週)	●		
7	C－2 (1)	3 歳 1 か月 (166 週)	●		
8	C－2 (2)	3 歳 1 か月 (166 週)	●		
9	C－2 (3)	3 歳 1 か月 (166 週)	●		
10	C－2 (4)	3 歳 1 か月 (166 週)	●		
11	C－3	3 歳 1 か月 (167 週)	—		
12	C－4	3 歳 1 か月 (167 週)	—		
13	C－5	3 歳 1 か月 (167 週)	—		
14	C－6 (1)	3 歳 1 か月 (167 週)	●		
15	C－6 (2)	3 歳 1 か月 (167 週)	●		
16	C－6 (3)	3 歳 1 か月 (167 週)	—		
17	C－6 (4)	3 歳 1 か月 (167 週)	●		
18	C－6 (5)	3 歳 1 か月 (167 週)	●		
19	C－6 (6)	3 歳 1 か月 (167 週)	—		
20	C－7 (1)	3 歳 2 か月 (169 週)	●	C	
21	C－7 (2)	3 歳 2 か月 (169 週)	●		
22	C－7 (3)	3 歳 2 か月 (169 週)	●	C 結合図	映像的表象期
23	C－8 (1)	3 歳 3 か月 (174 週)	—		
24	C－8 (2)	3 歳 3 か月 (174 週)	●		
25	C－8 (3)	3 歳 3 か月 (174 週)	—		
26	C－8 (4)	3 歳 3 か月 (174 週)	—		
27	C－8 (5)	3 歳 3 か月 (174 週)	—		
28	C－9 (1)	3 歳 3 か月 (174 週)	●		
29	C－9 (2)	3 歳 3 か月 (174 週)	●		
30	C－10 (1)	3 歳 3 か月 (175 週)	●		
31	C－10 (2)	3 歳 3 か月 (175 週)	●	C 結合図 から A 集合図 への移行	
32	C－11	3 歳 3 か月 (175 週)	●		
33	C－12	3 歳 3 か月 (175 週)	—		
34	C－13 (1)	3 歳 3 か月 (176 週)	●		
35	C－13 (2)	3 歳 3 か月 (176 週)	●		
36	C－13 (3)	3 歳 3 か月 (176 週)	●		
37	C－13 (4)	3 歳 3 か月 (176 週)	●		
38	C－13 (5)	3 歳 3 か月 (176 週)	●		
39	C－13 (6)	3 歳 3 か月 (176 週)	●		
40	C－14	3 歳 3 か月 (176 週)	—		
41	C－15 (1)	3 歳 3 か月 (177 週)	●		
42	C－15 (2)	3 歳 3 か月 (177 週)	—		

3. コンバイン〈結合図〉における描画の特徴

ダイアグラム二個が結合される時、私のコンバインと呼ぶものが出来る。
（中略）コンバインの試みは、児童が二つの形を結合しようとして実験していることを示す。（ローダ・ケロッグ 1998）

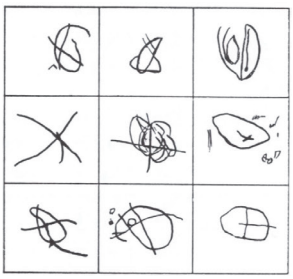
コンバイン〈結合図〉への移行は、ダイアグラム〈単体図〉において獲得した形態を複数組み合わせる構成が開始され〔図１〕、描画の表現目的が明確になり子どもの個性がより顕著に表れる。コンバイン〈結合図〉の発達過程において描画表現が活発になり個性が表出する要因として身体的発達、中でも脳の発達による影響が大きい。

3 歳～4 歳の脳の発達について、時実（1984）は「思考力」「創造性」「意志力」「情操」が 4 歳ころから働きだす前頭連合野で営まれると述べている。

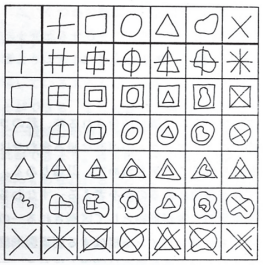
0 歳からおよそ 3 歳までの動作的表象期、ダイアグラム〈単体図〉において獲得した形態を複数組み合わせる「思考」が働き、その実験からダイアグラム〈単体図〉の形態記憶がさらに豊富になる。それらを素材としてデザイン（構成）する「創造的活動」が開始され、他者との交流や承認を原動力とし自分を表現しようという「意志」と喜びや悲しみといった「情操」が描画に表現される。自分の表現に対する他者の反応に刺激を受け、能動的に取り組む描画を含めた毎日のあそびの中で好奇心や意欲を高め、描画の発達とともに脳の発達、心身の成長が一体となって進められる。

表象の発達においては、動作による直接的な（感覚運動的）把握を中心とした「動作的表象」と形のイメージ（映像）による対象の把握が進む「映像的表象」を持ち合わせる点から、見る、知る、記憶の機能が活発となり、コンバイン〈結合図〉からアグリゲイト〈集合図〉の描画は子どもの生活やあそびの体験と記憶が表現に反映される。

図１.　　出典（Rhoda Kellogg 1998 p.53.54）



コンバインの試み（3 歳）

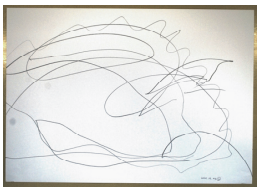


36 種類の可能なコンバイン

4. コンバイン〈結合図〉における描画表現と移行過程の考察

描画作品表Ⅰ～Ⅲの表記内容

構成	作品の記録		構成形態	発達
形態の構成過程	作品写真	抽出作品番号 ① 表２．作品番号（0～42） ② 描画時の年齢と週齢 ③ 描画時の表象期 ④ 描画中の子どもの言動、語り掛けの記録（保育者による記録） ⑤ 作品サイズ（縦×横 mm）	描画に構成されたダイアグラム〈単体図〉形態	絵画の発達段階

Ⅰ．波形ダイアグラムと円形ダイアグラムによるコンバイン〈結合図〉への移行過程				
構成	作品の記録		構成形態	発達
1．波形の重複		作品 D－4 (1) ① 表２．作品番号 0 ② 3 歳 0 か月（163 週目） ③ 動作的表象期 ④「こわいアンパンマン」 ⑤ 四つ切（392×542mm）		ダイアグラム〈単体図〉
2．波形と円形の重複		作品 C－2 (1) ① 表２．作品番号 7 ② 3 歳 1 か月（166 週目） ③ 動作的表象期・映像的表象期 ④ 「ビンドマン　バイキンマン」 ⑤ 四つ切（392×542mm）		ダイアグラム〈単体図〉からコンバイン〈結合図〉への移行
3．波形と円形の重複		作品 C－6 (3) ① 表２．作品番号 16 ② 3 歳 1 か月（167 週目） ③ 動作的表象期・映像的表象期 ④ なし ⑤ 四つ切（392×542mm）		ダイアグラム〈単体図〉からコンバイン〈結合図〉への移行

4．波形と円形の重複		作品 C－6 (4) ① 表２．作品番号 17 ② ３歳１か月（167 週目） ③ 動作的表象期・映像的表象期 ④ 「へんなたこ」 ⑤ 四つ切（392×542mm）		ダイアグラム〈単体図〉からコンバイン〈結合図〉への移行
5．波形と円形の包含		作品 C－6 (6) ① 表２．作品番号 19 ② ３歳１か月（167 週目） ③ 動作的表象期・映像的表象期 ④ なし ⑤ 四つ切（392×542mm）		ダイアグラム〈単体図〉からコンバイン〈結合図〉への移行
構成形態				

Ⅰ．１.～５.の描画５点は、波形ダイアグラムと円形ダイアグラムによるコンバイン〈結合図〉への移行過程を示す。同形のコンバイン〈単体図〉を用いた構成は同日連続して描画される場合と数日あるいは数週間という期間を経て描画される場合もあり、描画のタイミングは子ども主体である。この比較においては、ダイアグラム〈単体図〉作品１.「波形の重複」作品 D－4 (1)の中で波形のダイアグラム〈単体図〉を複数構成しようとする試みから、コンバイン〈結合図〉の兆候が表れる。その３週間後に２.「波形と円形の重複」作品 C－2 (1)で円形と波形のダイアグラム〈単体図〉を複数（4 種）構成する試みから結合図〈コンバイン〉に移行し、実験的にデザインを探索している段階である。３.～４.「波形と円形の重複」作品 C－6 (3)と作品 C－6 (4)は、２.作品 C－2 (1)から１週間後、同日連続して描画された６点中の２点である。波形と円形のダイアグラム〈単体図〉による構成の試みからコンバイン〈結合図〉となり、次の作品５.「波形と円形の包含」作品 C－6 (6)では１.～４.で使用したダイアグラム〈単体図〉の形態を融合させ、新たなデザインが創造された。

「へんなたこ」と題された４.「波形と円形の重複」作品 C－6 (4)の 11 日前、幼稚園で本物のたこを観察する機会があり、その体験後描画された作品に「すごいたこ、たこ、たこ、幼稚園で見たことあるよあしがいっぱい」「ちっちゃいたこ」との発言記録がある。園での観察体験から映像記憶、感動、他者（母親）に向けての共感と自己主張も加わり描画に表現されている。このことから４.作品 C－6 (4)は、ひとつの体験から対象へのイメージを広げ、新しい形を作り上げる工程を示す作品と考えられる。

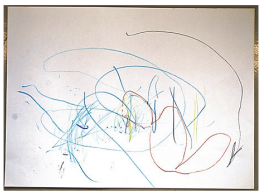
Ⅱ．円形ダイアグラムと縦重複によるコンバイン〈結合図〉からアグリゲイト〈集合図〉への移行過程

構成	作品の記録		構成形態	発達
1．不定形と縦線の重複		作品 C－2 (4) ① 表２．作品番号 10 ② ３歳１か月（166 週目） ③ 動作的表象期・映像的表象期 ④「黒いさかながしんだ」 ⑤ 四つ切（392×542mm）		ダイアグラム〈単体図〉からコンバイン〈結合図〉への移行
2．円形に縦線を包含		作品 C－6 (5) ① 表２．作品番号 18 ② ３歳１か月（167 週目） ③ 動作的表象期・映像的表象期 ④ 「ぬりたくなったかいじゅうのいにさんご」 ⑤ 四つ切（392×542mm）		ダイアグラム〈単体図〉からコンバイン〈結合図〉への移行
3．円形に縦線を包含		作品 C－7 (1) ① 表２．作品番号 20 ② ３歳２か月（169 週目） ③ 動作的表象・映像的表象期 ④「ママ」 ⑤ 四つ切（392×542mm）		コンバイン〈結合図〉
4．円形に縦線を包含		作品 C－13 (5) ① 表２．作品番号 38 ② ３歳３か月（176 週目） ③ 映像的表象期 ④「みかん２こ」「おばけ」 ⑤ 四つ切（392×542mm）		コンバイン〈結合図〉からアグリゲイト〈集合図〉への移行
構成形態				

Ⅱ．１.～４.の描画４点は、円形ダイアグラムと縦重複によるコンバイン〈結合図〉、アグリゲイト〈集合図〉への移行過程を示す。１.「不定形と縦線の重複」作品 C－2 (4) で縦の重複線と不定形、円形ダイアグラム〈単体図〉の構成から５日後、構図が整理されたデザイン２.「円形に縦線の包含」作品 C－6 (5)を描画。５日間という時間の経過があるが、画面上の配置が同じ位置に構成されており２点には連続性が認められる。３歳１か月

となり動作的表象と映像的表象をあわせ持つ中で形態を映像として記憶に定着させ、新たな描画素材を使った描画の探索から、次の発達段階アグリゲイト〈集合図〉への移行が表れる。３.「円形に縦線を包含」作品 C－7 (1)「ママ」と題された作品には、男児 K の描画する頭足人間に、初めて髪の毛、足の指が表現された。その表情には描画対象への情愛が表出し、初めて頭足人間の足に指が描画されている。この頭足人間から 46 日後に描画された４.「円形に縦線を包含」作品 C－13 (5)は３.作品 C－7 (1)と共通する色、縦往復、円形のダイアグラム〈単体図〉に不定形のダイアグラム〈単体図〉が加わり「みかん２コ」「おばけ」と題され３. 作品 C－7 (1)と同形のダイアグラム〈単体図〉を用いて「みかん」や「おばけ」の目として描画されている。男児 K の縦断的作品群に描画された頭足人間は、同日連続して描画された場合でも完全に同じデザインの頭足人間は存在しない。コンバイン〈結合図〉の描画過程は、実験と探索がより活発になる時期であり、その日にしか生まれない描画も多く存在する。ここでの豊富な描画体験が次のアグリゲイト〈集合図〉において表現の基盤となる。

Ⅲ. 楕円型不定形ダイアグラムと円形ダイアグラムによるコンバイン〈結合図〉から
アグリゲイト〈集合図〉への移行過程

構成	作品の記録		構成形態	発達
1. 不定形の重複		作品 C－3 ① 表２. 作品番号 11 ② 3 歳 1 か月（167 週目） ③ 動作的表象期・映像的表象期 ④ なし ⑤ 四つ切（392×542mm）		ダイアグラム〈単体図〉から コンバイン〈結合図〉への移行
2. 不定形の分離		作品 C－7 (3) ① 表２. 作品番号 22 ② 3 歳 2 か月（169 週目） ③ 映像的表象期 ④ 「おばけいっぱい」 ⑤ 四つ切（392×542mm）		コンバイン〈結合図〉
3. 不定形の分離		作品 C－8 (4) ① 表２. 作品番号 26 ② 3 歳 3 か月（174 週目） ③ 映像的表象期 ④ なし ⑤ 四つ切（392×542mm）		コンバイン〈結合図〉

4. 不定形に円形の包含		作品 C－13 (4) ① 表２．作品番号 37 ② ３歳３か月（176 週目） ③ 映像的表象期 ④ 「おばけ目がある？」 ⑤ 四つ切（392×542mm）		コンバイン〈結合図〉からアグリゲイト〈集合図〉への移行
構成形態				

Ⅲ．１.～４.の描画４点は、楕円型不定形と円形のダイアグラムによるコンバイン〈結合図〉からアグリゲイト〈集合図〉への移行とデザイン過程を示す。１.「不定形の重複」作品 C－3 は、重複された円形と楕円型不定形の上に複数の斜め線も構成され、その描画からおよそ 2 週間後２.「不定形の分離」作品 C－7 (3)で楕円型不定形のダイアグラム〈単体図〉が分離して配置された構成となる。２.作品 C－7 (3)の描画から４週間後に３.「不定形の分離」作品 C－8 (4)で楕円型不定形の構成によるデザイン（作品右下赤線）が明確になり、その 2 週間後４.「不定形に円形の包含」作品 C－13 (4)で二つの楕円型不定形から描画の開始位置と終点位置が完全に一致したひとつの形態になり、そこに目の表情が加わり「おばけ」として描画された。以上 4 点の流れから、およそ 9 週間の間に複数のダイアグラム〈単体図〉による構成が繰り返された後、テーマをより端的に表現するための形態整理が行われている。Ⅲ. 楕円型不定形と円形のダイアグラムによるコンバイン〈結合図〉で比較された２.作品 C－7 (3)169 週目～４.作品 C－13 (4)176 週目まで表現形態は一貫している。１.作品 C－3 の楕円型不定形のダイアグラム〈単体図〉から始まり２.作品 C－7 (3)，３.C－8 (4) コンバイン〈結合図〉において、複数の楕円型不定形のダイアグラム〈単体図〉が構成され４.作品 C－13 (4)で「おばけ」のデザインに整理された。男児 K の縦断的描画の記録において４.作品 C－13 (4)「おばけ」と同型の形態は、次の発達段階アグリゲイト〈集合図〉に入った 3 歳 4 か月 178 週目にも描画され、以後は新たなテーマの描画素材として活用されている。映像的表象期の中で幼稚園や日常生活での行動や体験が豊富になり、映像や絵本などで目にした形を記憶から再現（模倣）し、保育者あるいは子ども同士で「おばけだよ」「おばけだね」といった会話や共感により、アグリゲイト〈集合図〉に向けて描画の発達と自己表現を確立していく。

Ⅲ．における作品 4 点の制作工程には、形態を整理する創造的デザインが表れている。この意識は芸術におけるデフォルメと省略であり、コンバイン〈結合図〉は人間が芸術の領域へと足を踏み入れる最初の描画工程といえる。

5. まとめ　～コンバイン〈結合図〉への関わり～

コンバイン〈結合図〉からアグリゲイト〈集合図〉にいたる描画の移行作品の考察において、男児Kのコンバイン〈結合図〉は3歳1か月（166週）～3歳3か月（177週）のおよそ2か月間で次の発達段階アグリゲイト〈集合図〉の兆候が表れ、男児Kの描画の発達段階の中で最も短い期間で移行している。

ローダ・ケロッグは、3歳から5歳の子どもの描画の大部分をアグリゲイト〈集合図〉が占め、子どもは個人ごとに自分の描画スタイルを作り上げると述べている。子どもは各描画発達へ向けて前進、後退を繰り返しながら発達を遂げるため、期間が短いダイアグラム〈単体図〉やコンバイン〈結合図〉はスクリブル期からアグリゲイト〈集合図〉への移行期とも見られるのである。

本論で取り上げたコンバイン〈結合図〉からアグリゲイト〈集合図〉の描画発達の時期、言葉の発達とともに保育者とのコミュニケーションも豊富になり、表現への意欲や探求心が芽生え、表現活動がより活発になる。幼児教育の現場においては同じ年齢であっても月齢や育った環境、人間関係（家族、兄弟姉妹）、子どもの個性が描画表現に表れるため、他の子どもの作品と比較した保護者から保育者に向けて相談や質問も生じやすい。

この時期の描画への関わりについて、大脳のメカニズムと描画活動の意義を提起した園田（1980）は次のように述べている。

> 外形の特徴を把握する力は頭頂・後頭連合野の理解や認識機能の発育と前頭連合野の組織の充足による。思考力や意志力の強化によっていっそう伸びてくる。（中略）この時期はまだものの形は不十分であるし対象と全くちがった色など使うことが多い。親や教師のなかに早く教えて正確な形や色の上手な絵を描かせようとする人がいるが、教えこむのではなく、子どもの主体的な意欲から生まれる知識欲と豊かな感受性を大切にして、その子の造形活動をはげましほめてやることで子どもが自分から気づくようになる。（園田正治 1980）

コンバイン〈結合図〉の時期は、お互いに共通認識できる具体的な物の形、表象画が生み出されるため、子どもの描画発達を実感し、さらなる成長を期待するあまり大人が子どもの描画に対して具体的形や表情といった表現方法を指導してしまう場合も多い。大人の発達段階で描画したお手本を示し、子どもに描画を促すという描画へのかかわりは、完成作品としての結果を優先するものであり、最も重要な子どもの表現目的やそのきっかけとなった感動や出来事への共感の機会を失うことになる。

子どもが自信を持って楽しく表現しながら発達を遂げるために必要な支援として、子どもの描画と表象の発達過程の理解と表現の尊重、主体的に描画を実体験できる環境作り、新

しい体験や表現を探索するための勇気づけと共感、活動の記録や作品の保存などが挙げられる。中でも保育者や保護者による描画活動の観察記録と作品は、基本的な人間形成がなされる幼児期の成長過程を示す貴重な記録であり、将来本人が自己分析する上で重要な情報源となる。描画作品の記録は、描画が生まれる現場に立ち会い、ひとり一人の子どもにとって最大の理解者である保育者から保護者へ、そして将来表現者本人に継承されることが望ましい。

あとがき

本学の通信教育課程において、筆者の「幼児表象画の発達」講義を受講した受講者から、次のような報告を受けたことがある。自身の子どもが通う幼稚園で描画するテーマ、目や鼻の形や描き方を細かく指定され、それが描画できるまで繰り返し修正させられていた。次第に園から持ち帰る子どもの絵に活き活きとした生気や個性が失われると同時に子どもの活気がなくなり、登園する際の足取りも重く園に行きたがらなくなった。さらに、家庭で自由に絵を描く環境を作っても「教えてもらわないとどう描いていいかわからない」と子どもが訴えるようになった。その時は、これまで伸び伸びと絵を描いていた子どもが、なぜ描画を楽しめなくなってしまったのか原因が分からなかったが、子どもの描画発達について学んだ今、なぜ活気をなくしていったのか、その理由が理解できたし、その時の子どものつらさを思うと原因に気づいてあげられずかわいそうなことをした。これからは子どもの絵に同じ目線でかかわり、共感することを大切にしたいという内容であった。この子どもは小学校入学後に通っている学童保育で、主体性と自由な表現が尊重される造形活動の環境に恵まれ、表現の楽しさを体験したことで、現在は寝る間を惜しんで造形あそびに夢中になっていると聞いた。これまでの抑圧された表現から解放され、主体的に創作を楽しんでいる。描画の発達期に行き過ぎた指導を受けたとしても早い段階で自由な表現が認められる環境が与えられれば、探索の意欲を失うことなく再び表現を楽しむことができる子どもの強さと柔軟性に安堵する一方で、表現への意欲や自信が萎えてしまったまま成長する場合もあることを考えると、全ての描画の発達を遂げ、人生における自己表現の基礎を確立させる幼児教育期の大切さを改めて実感する。

今後、保育者や保護者と子どもの描画表現についてともに考え、情報を共有できる機会を作ることは、描画発達の研究を深めることと同様に、筆者にとって重要な課題である。

参考文献

J. S. ブルーナー著，　岡本夏木他訳（1976）『認識能力の成長（上・下）』，明治図書出版.
園田正治著，（1980）『子どもの絵と大脳のはたらき』，黎明書房.
竹永亜矢・塙和道著，（2017）「美術表現研究　講義「幼児表象画」の縦断的記録の検証」『近畿大学九州短期大学研究紀要』，第 47 号 pp.64 - 84
竹永亜矢・塙和道著，（2018）「美術表現研究　講義「幼児表象画」の描画の発達と特徴」『近畿大学九州短期大学研究紀要』，第 48 号 pp.38 - 53
竹永亜矢著，（2019）「美術表現研究　講義「幼児表象画」スクリブル期の描画発達」『近畿大学九州短期大学研究紀要』，第 49 号 pp.37 - 51
竹永亜矢著，（2020）「美術表現研究　講義「幼児表象画」ダイアグラム〈単体図〉の描画発達」『近畿大学九州短期大学研究紀要』，第 50 号 pp.16 - 30
時実利彦著，（1984）『脳と保育』，雷鳥社.
内閣府編著・文部科学省編著・厚生労働省編著，（2017）『平成 29 年告示 幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 原本 』，チャイルド本社.
塙和道・竹永亜矢著，（2016）「幼児表象画に学ぶ、講義「人物画物画演習」の導入法と描法」『近畿大学九州短期大学研究紀要』，第 46 号 pp.47 - 51
ハワード・ガードナー著，星美和子訳（1996）『子どもの描画　ーなぐり描きから芸術までー』，誠信書房
宮武辰夫著，（1985）『幼児の絵は生活している』，博文社.
ローダ・ケロッグ著，深田尚彦訳（1998）『児童画の発達過程　ーなぐり描きからピクチュアへー』，黎明書房.